

鶉殿ヨシ原の筆策ヨシの文化的価値と伝統知の保全 及び筆策ヨシ再生に関わる技術的条件

柴田, 知己

<https://hdl.handle.net/2324/6787620>

出版情報 : Kyushu University, 2022, 博士 (芸術工学), 課程博士
バージョン :
権利関係 :

氏 名 : 柴田 知己

論 文 名 : 鶺鴒ヨシ原の箆築ヨシの文化的価値と伝統知の保全及び
箆築ヨシ再生に関わる技術的条件

区 分 : 甲

論 文 内 容 の 要 旨

大阪府高槻市の淀川高水敷に生育する鶺鴒（うどの）ヨシ原のヨシは、重要無形文化財である雅楽で演奏される箆築（ひちりき）のリード部分（蘆舌（ろぜつ））に古来より使用されている。箆築の蘆舌に適した品質のヨシ（以下、箆築ヨシと表記）が採取できなくなると重要無形文化財としての価値に影響を及ぼす恐れが生じる。

ヨシの採取者についてみると、近年ヨシの流通量の減少から採取者の減少がみられる。このことは箆築ヨシの採取・選抜手法が消失する恐れが生じており、箆築ヨシに適した品質のヨシの採取を継続していくことが危ぶまれる。鶺鴒ヨシ原の生育環境の変化についてみると鶺鴒ヨシ原の乾燥化が進行し、湿地を好むヨシの衰退やつる植物の繁茂が顕著になり、ヨシ生育範囲の縮小につながった。このような鶺鴒ヨシ原のヨシの衰退が続く中、2012年に鶺鴒ヨシ原の一部を橋梁にて通過する高速道路事業が始まり、箆築ヨシの保全が改めて検討される契機となった。

ヨシ原の再生については多く議論されてきているが、箆築ヨシに適した品質のヨシが採取できる場所は稀有であり、箆築ヨシに適した品質のヨシ再生に関する学術的な研究はなく、議論はほとんどされていない。

箆築ヨシを採取する熟練採取者の伝統知に依存し、これまで箆築ヨシが採取されてきたが、社会環境の変化により伝統知が失われる可能性があるため、技術的側面から採取条件を明らかにする必要があると考えた。また、生育環境が失われることに対し、伝統知により採取されてきた箆築ヨシと同等なものを獲得するための栽培技術を明らかにすることは、生育場所の再生にも役立つと考えた。

伝統知または鶺鴒ヨシ原が消失する可能性に対応することの必要性を踏まえ、本研究では「鶺鴒ヨシ原の箆築ヨシの文化的価値と伝統知の保全及び箆築ヨシ再生に関わる技術的条件」を研究目的とした。これらの研究目的に対応するために二つの研究課題を設定し、技術的側面から調査・検討して知見を得た。

第一の研究課題は、箆築ヨシ採取手法の伝統知からみた課題である。箆築ヨシを採取する際に保有する採取基準及び箆築ヨシを採取するエリアを選別する手法は、採取活動の継承から発展してきた伝統知であり、技術的側面から明らかにすることが必要であると考えた。

第二の研究課題は、箆築ヨシの再生に関わる栽培技術の課題である。このままヨシ原全体の衰退が進行すると箆築ヨシを採取できる場所が将来消失する可能性がある。自然環境下で収穫できる箆築ヨシの栽培技術を明らかにすることは、鶺鴒ヨシ原自体が消失する事態に対応可能となると考えた。

具体的には、第一の研究課題に対応するため、鶺鴒ヨシ原で採取される箆築ヨシを分析することで、箆築ヨシ採取手法の伝統知を採取地の採取条件として明らかにした。第二の研究課題に対応するため、鶺鴒ヨシを栽培試験し、箆築ヨシの品質に到達する年数と箆築ヨシ品質の取得率を分析することで、箆築ヨシが再生可能であることを明らかにした。

第1章では、研究の背景、目的を論じた。

第2章では、研究全体の構成を示した。

第一の研究課題については、第3章で詳述した。熟練採取者は効率よく採取できる場所を選別する過程で、草丈を一つの条件として採取場所を選定していることが示唆された。また、筆筭ヨシが多く採取されていた場所での土壌硬度の調査結果から、軟らかな土壌であることを示した。次に、熟練採取者は水域のヨシを筆筭ヨシとして採取せず、筆筭ヨシに適さないことを明らかにした。また、筆筭ヨシを採取するためには、草丈が4,000mm程度のヨシがまとまって生育する箇所を優先的に採取地として選別することが最適であることを明らかにした。熟練採取者の「伝統知」について、筆筭ヨシに適した品質を確保できるヨシを効率的に採取できる場所として選別できる技術的条件を明らかにした。

第二の研究課題については、第4章と第5章で詳述した。第4章では、鶺鴒ヨシ原の再生・保全のために筆筭ヨシの品質を有するヨシを栽培できる可能性と技術的条件を明らかにするため、実生苗を用いた栽培試験から、ヨシの形状・寸法・年数を評価した。実生苗栽培試験では、筆筭ヨシとして利用できるヨシを採取するためには、草丈が4,000mm程度のヨシが必要であることを明らかにした。また、草丈4,000mm程度のヨシが栽培可能であった。

第5章では、地下茎苗を用いた栽培試験結果から、時間経過とともに地下茎重量が増大することを明らかにした。

第6章では、栽培試験で筆筭ヨシに適したヨシの品質を確保できる技術的条件を明らかにするため、単位面積当たりの筆筭ヨシの取得率を算出し、筆筭ヨシの採取効率を評価した。実生苗を6年間栽培すると、鶺鴒ヨシ原の標準的なヨシ群を再現できることを明らかにした。さらに筆筭ヨシの品質水準を草丈と茎径から導きだし、栽培したヨシの一部は、筆筭ヨシ品質のヨシであることを明らかにした。また、試験栽培地は鶺鴒ヨシ原の筆筭ヨシ採取場所の半分程度の筆筭ヨシの生産能力をもつ可能性を示した。

第7章では、調査・検討で把握した内容を総括し、熟練採取者の伝統知で慣行してきた採取手法に相当する技術的条件を見出せたことで、熟練採取者の採取技術の継承を補完し、技術的に再現できる可能性を示した。また、筆筭ヨシの再生について、筆筭ヨシに適した品質のヨシが栽培可能であることを明らかにした。さらに、筆筭ヨシが採取できる生育環境の変化に対応できる技術的知見を見出すことで、鶺鴒ヨシ原の再生に更なる検討の余地が生まれてくる可能性を示した。